

添嶋 讓 | into the blue



into
the
blue

出会う

朝起きて、学校に行って、勉強して、夕方帰ってきて、宿題やったり音楽を聴いたり小説を読んだり。適当な時間に眠くなって、また明日。そしてその繰り返し。

友達のいない少年にとっての毎日は、考える隙もないくらいに平坦で退屈です。けどそれはもう慣れっこになっていたし、なにより少年にとってはそれが普通の生活だったのでなぜこういうことになってしまったのかも忘れてしまうほどでした。

けど、学校にいるふとしたときや布団にもぐって眠りにつくまでのあいだ、誰かそばにいてくれたらいいのに、一人だとなにかとつまらないな、と思うことがあるのでした。ため息をつくようなことはありませんでしたが、クラスの他のひとたちがうらやましくなることはあるのです。

あるとき、本屋で立ち読みをしていた雑誌に友達キットというものが紹介されていました。それはいわゆるコミュニケーションロボットのことで、プログラムを組込めば自律する。会話もできるし、遊ぶこともできる。大きさまではわかりませんが、ずいぶん精巧なつくりのようです。なんといっても人間のかたちをしているのです。知らないひとが見たら、きっと普通の人間との区別はつかないでしょう。友達キットと街を歩く写真は少年にとっては夢のような場面でした。

いつもだったら読み流してしまうようななんでもない記事だったのですが「友達キット」という名前が引っかかって結局最後まで読んでしまいました。

これがあったら話し相手にもなってもらえるのだろうか。返事してもらえるのだろうか。ビーグル犬のぬいぐるみに話をするような、そんな子どもじみたこともしなくてすむのかな。

次の休みの日、友達キットを扱っている店に行ってみました。店に着くまでは小説で読むような魔法使いかマッドサイエンティストの出てくるような怪しげなところかと思っていきましたが、そこにあったのは拍子抜けするくらいに普通の、どこにでもあるような模型屋さんでした。

中に入って天井まである棚をぐるりと見渡します。車、飛行機、アニメのロボット、キャラクター。人気のない、今にも崩れてきそうな箱の積みあがる店を奥のほうまで探していきます。そして、店のいちばん奥にそれはひっそりとありました。

.....こんなに大きな箱なんだ。

本当は箱の大きさよりも不器用な自分でも作ることができるかどうかだけが気になることでした。せっかくの友達キットなのに肝心なところで失敗してしまっただけが目にいってしまっただけで良い関係を作れないかもしれません。

「なに、それが気になるのかね？」

お店のひとに聞かれても返事ができません。欲しいのか、欲しくないのか。なにがどう気になるのか。頭の中は真っ白です。長い時間をかけてようやく言葉を口にします。

「友達キットをさがしています。ほしいと思って。僕でもなかよくなれますか」

お店のひとはやっぱりそうだと思ったよ、と笑っています。いつもされるみたいにバカにしたよう

な笑いではなく、待っていたよ、という穏やかな顔でした。

「自分で呼びかけてごらん。青く光って返事をする、それが君の探している友達キットだ」

なんていって声をかけていいかわかりません。普段自分から話しかけることなんか無いのです。しばらく考えましたが思いつく言葉はたった一つだけでした。

「いっしょに僕の家に来て。僕といっしょに」

どのくらいの時間がたったでしょう。ちょうど右側の棚の上のほうで青く光る箱があります。あれだ。お店のひとはそれを下ろしてきて少年に渡しました。

大事にするんだよ。

箱を渡された少年は落とさないようにそっと抱えます。そしてお店のひとにお礼を言うと、ほおの辺りがゆるみそうになるのに気をつけながら店を出ました。

帰り道、少年は何度も箱をかかえなおします。誰かに見られたらどうしよう、とは思いましたが、不思議と誰ともすれ違うことはありませんでした。

返事をしてくれてありがとう。一緒にきてくれて。

そう、こころの中で言うとまた青く光って返事をしてもらえたように見えたのでした。

名付ける

家にやってきた友達キットを、少年はさっそく組み立てます。なにかを組み立てるのは初めてなので、とても慎重に行います。ランナーから部品を外して、説明書のとおり組み合わせるだけなのですが、変なふうにしてしまうと友達キットが痛いというような気がして、刃物を使うときや部品をあわせるときにも緊張してしまいます。

頭から足の先まで全て組み立てて配線を終わると、最後にセットアップをします。「ごめんね、窮屈だったでしょ。もうすぐ動けるようにするからね」大きく深呼吸をしてスイッチを入れます。ブン、という音がして小さなディスプレイにありがともります。

ナマエ？

名前をつけなくてはいけないようです。

どうしよう。

一瞬、ずっと友達になりたかったクラスメイトの名前にしようかとも思いました。だけど、その名前をすると呼ぶことができるのでしょうか？

少年は回りに誰もいないことを確認します。まるで悪いことを始めるような気分でした。深呼吸をしてそのひとの名前を呼んでみることにします。少年の部屋の中にはとても長い沈黙がありました。

……。……。……。のん

……。できないよ。呼べるわけがない。

少年はずっと息を止めていたみたいに肩で息をします。誰も見ていたわけでもないのに顔は真っ赤です。

困ってしまいました。名前をつけないことには先に進めません。

思いつく名前を順番に口にしてみましたが、どれも違うような気がします。持っている小説の中から。昨日立ち読みしたマンガの中から。偶然見たドラマの中から。どれでもいいはずなのに、どれも違う。途方に暮れるってこういうときのことを言うのかな。少年はぼんやりと考えます。

のんちゃん。

思いきって口にしてみました。

模型屋で声をかけたときにそうだったように、友達キットのどこかが青くぼうっと光っているような気がしました。のんちゃん。のんちゃん。

やっぱりそれでいいんだ。

なんだか恥ずかしいのは変わりませんし、こんなの学校でばれたらどうなるか考えただけでも怖い気がするのですが、友達キットが自分でこの名前がいいといったのです。そうしない理由はないはず。少年はちょっとだけ腹をくくりました。ばれなきゃいいんだ。

「彗星」系の男は、スケジュール管理が得意です。

あれは何年に一回、これは何年に一回と間違えずに彗星を送りだします。

飽きてくると頼まれてもいないのに、新しい彗星を送りだすことがあります。

そういう時は誰かに見つけて名前がつくまでの時間を計るのが楽しみです。

「流れ星」係の男は野球選手でした。

昔から遠投が得意で地平線の向こうまで星を投げたことは自慢の一つです。

仲間と競うように星を投げる時が一番楽しく、それ見た人々はその様子を流星群と呼びます。

今夜は願い事を叶えたい女の子のためにたくさん星を投げることになっています。

幻灯機（あるいは自由落下の法則）

何年か前に

衝動的に窓から飛び降りて死んだひとがいるのだそうだ

その人の机をかたづけてしまうときまってよくないことが起こる

だからいつまでたっても誰も使うことのない机がここに残されているのだ

という

学校の七不思議からも仲間外れにされそうな噂があつて

だけどもどうにかするつもりのないひとばかりがそろっているものだから

その死んでしまったひとのかわりに机が生き永らえてしまっている

そしてそれはいま僕の座席の横にある

実際のところ

飛び降りたのが誰でなぜそうしなければならなかったのかなんてことは

誰も知るはずもなく（だいたいそれがいつのことかさえも知らない）

ここにこうして一人分の座席を確保してあるのだという事実だけが必要であるみたいに

今日も一度も動かされることなくいつもの位置に机は存在する

ただ

あの連中はここには近づこうとはしない

僕の場所もここからかわることはないだろう

誰かがいっていたように僕はいけにえとしてここにいるのかもしれない

（あるいはいけにえとしか機能させてもらえないとも言える）

彼らがいうようにだから今日も何事もなく一日が過ぎてゆく

僕はまだ一言も言葉を発していない

昨日もそうだったように明日もそうなのだろう

授業をうけていて暇もなにもないのだけれど

なんとなく思いたって僕は窓の外に体を置いてみる

ほんの一瞬のことだったので落ち着いて考えることもあまりできないけれど

詩集・INTO THE BLUE

<http://p.booklog.jp/book/25470>

著者：添嶋 譲

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/literary-ace/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/25470>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/25470>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.